

# 緩和ケアは特別なケアではなく 患者さんの日常を支える 看護の基本です。



函館おしま病院看護部長  
(緩和ケア認定看護師)  
あきは せいこう  
**秋庭 聖子**

函館おしま病院看護部長の秋庭聖子さん(同病棟の看護部長室にて)。

## カナダのホスピスで行われている音楽療法が 緩和ケアを目指すようになった出発点

今年4月、函館おしま病院の看護部長に就任

今年4月函館おしま病院(福徳雅章院長)の看護部長に就任したのが秋庭聖子さんだ。3月まで青森県立中央病院で緩和ケアを担当していた秋庭さんは愛知県出身。地元の高校に進学後は公務員や教師を目指していた。「大学の入試試験は目標を実現させるための第一歩でしたが、試験当日はしつくりとしない気持ちに襲われました。看護学校を受験する友人を見て、大学以外の選択肢があることに気がつきました」。

当時、胃がんの患者に告げられる病名は胃潰瘍

名古屋赤十字看護専門学校を卒業後、名古屋第一赤十字病院へ勤務。希望した外科病棟ではなく、配属は中央手術室だった。「最初は役立たずの自分に自己嫌悪の日でした。『術野を見るように』と先輩から言われたことを忘れずに、イメージトレーニングを繰り返しました。そして医師の指示がなくても、次に必要な器具を予測できるように、新人でも評価されたことは自信につながりました」。

「当時、胃がんの患者に告げられる病名は胃潰瘍です。進行がんにことになりました」。

函館おしま病院は平成16年4月ホスピス病棟(緩和ケア病棟)20床を開設した。「ホスピス病棟では、まさにホスピスのケアがしっかりと行われています。そして36床ある介護病棟(介護療養型病床)でのケアがものすごく良いことに感じました。入院患者さんの口や体がとても綺麗で、毎日のケアがきちんと実践されていることを証明しています。当院はホスピス病棟が高く評価されていますが、介護病棟のケアも高い点数を付けることができます」。

看護部長の役割について、秋庭さんは「癒し癒される心からの医療という当院の理念にあるように、患者さんとご家族にほっともらえるような『温かい心』が感じられる看護と介護を提供できるようにすることです」と話す。「緩和ケアは特別なケアではなく、患者さんの日常を支える看護の基本です。そしてケアの対象は患者さんやご家族だけでなく、職員や家族も対象です。職員全員が常にホスピスマインドを忘れることなく、すべての人に気づかいや配慮ができるように貢献していきます」。

の場合も事実を知らされることなく、亡くなる事例を目の当たりにして、疑問や憤りを感じていました」。昭和62年厚生省で「末期医療に関するケアの在り方の検討会」が開催され、同時期に東京で「ホスピスケア研究会」が発足。研究会に参加して、がんの痛みがとれることを知った秋庭さんは、病院の仲間と「ターミナルケア研究会」を設立する。「院内のがん患者に対する疼痛管理に改善はありませんでしたが、これは名古屋だけの問題ではなかったのです。自分が担当した白血病患者3人が真実を告げられなまま亡くなった後、病院を退職しました」。

カナダの大学病院では音楽療法士が患者に合ったカセットテープを選択

退職後はモントリオールのマギル大学ロイヤルビクトリア病院で緩和ケア研修を受けるために留学した。「きっかけは聖路加国際病院の日野原重明先生の『カナダにある大学病院のホスピスで音楽療法が行われている』という記事に強い興味を持ったからです」。ロイヤルビクトリア病院では緩和ケア病棟の他、コンサルテーション型の緩和ケアチームが活動してい

た。「スタッフは医師や看護師の他に理学療法士、作業療法士、社会福祉士、音楽療法士など多職種が関わっていました。音楽療法士はがん患者から話を聞いて、その患者に合った音楽のカセットテープ数本をベッドサイドのテーブルに置いていきます。カセットテープは多数が用意されていて、音楽療法士はオルガンを部屋に持ち込んで生演奏をすることもありました」。帰国後は愛知国際病院(愛知県日進市)に勤務。愛知県にホスピスを作る市民ボランティア活動にも参加した。愛知国際病院のホスピスは市民の声によって県下で最初に設立されたホスピスとなった。

ホスピスケア認定看護師1期生7人の1人に

平成11年ホスピスケア認定看護師1期生7人の1人となる(後にホスピスケアの名称は緩和ケアに変更)。認定看護師となった直後、結婚して青森に移り住み、青森慈恵会病院に勤務し緩和ケア病棟を立ち上げた。その後、青森県立中央病院に勤務した。そこで一番驚いたことは、がんの告知が当たり前にされていたことだったと秋庭さんは当時を振り返る。「現在、

三沢市立三沢病院の坂田優病院事業管理者が青森県立中央病院の消化器内科部長時代に、告知をせずつにがんの治療はできないとの考えで積極的に告知をしました。その結果、病院ではがんの告知が当たり前に行われるようになったのです」。

青森県立中央病院で緩和ケアチームなど立ち上げに關わる

平成15年10月青森県立中央病院の緩和ケアチームや患者家族相談支援室、がん相談外来立ち上げに關わった。「患者・家族相談支援室では年間5〜6千件の相談を受けるのですが、そのうちがん相談は全体の約3分の1を占めています。相談内容は治療費の支払いに關することなど、お金の悩みも多くあります。経済的な問題は社会的な問題に含まれます。患者さんやご家族が苦しんでいる治療費の負担のことを一緒に考えて考えることは十分に緩和ケアと言えるはずですよ」。

秋庭さんは3人の娘の母親でもある。「長女が函館の高校へ進学したのを契機に、次女と三女も同じ学園に入学をしたので、娘3人と函館での生活をスタートさせる